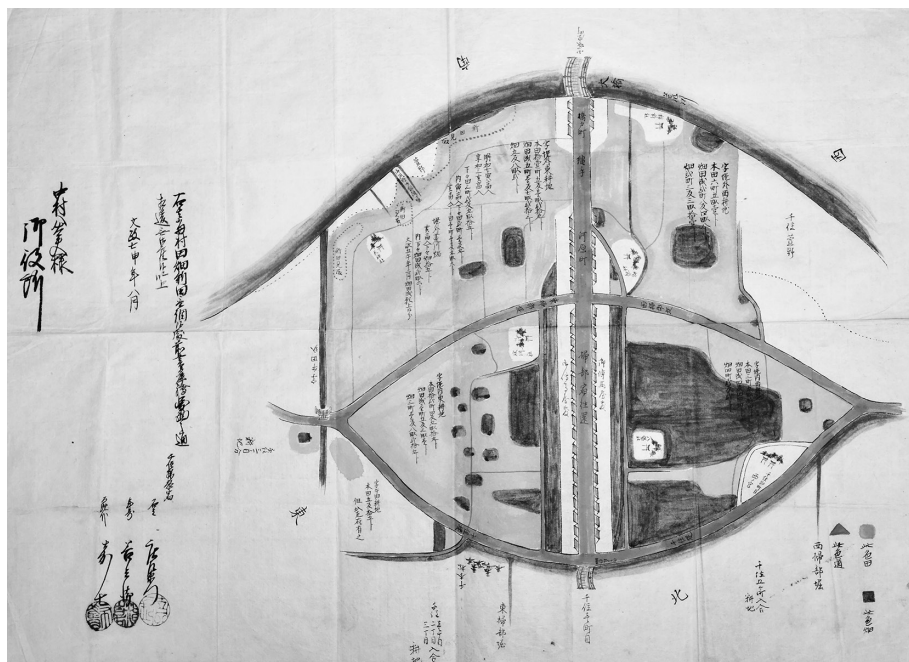


もくじ

千住宿開宿400年へ 石出家資料 千住掃部宿絵図の紹介… P1
 新田開発と稲荷… P2 お化け煙突60年③燃料②… P4

千住掃部宿絵図 石出家文書 郷土博物館蔵

濃い色は畑地、ひろく塗られている薄い色は水田



足立史談

第675号

2024年5月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

T E L 03-3620-9393

F A X 03-5697-6562

せんじゅじゅく 千住宿開宿400年へ せんじゅ かもん じゅく 石出家資料 千住掃部宿絵図の紹介 郷土博物館

■千住掃部宿の絵図

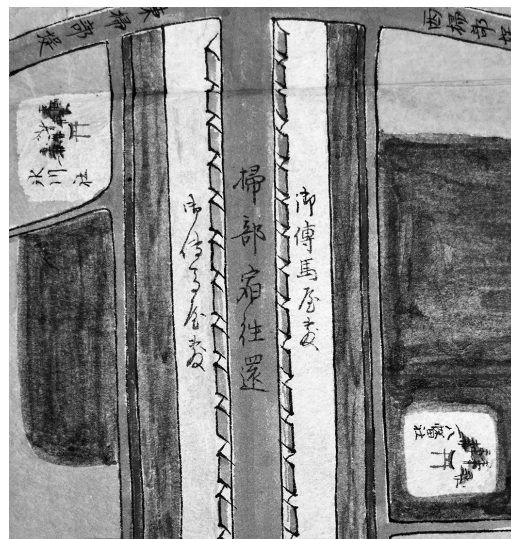
上に掲げた絵図は千住掃部宿の旧家、石出家に伝来した文政七年（一八二四）の絵図です。絵図の上が南で千住大橋が描かれ下が千住一丁目との境目となっています。範囲は現在の千住仲町、千住河原町、千住橋戸町を中心として、北は大踏切通りあたり、南は隅田川、西（右）は千住龍田町交差点、東（左）は牛田駅・京成関屋駅あたりとなります。

掃部宿の絵図に河原町、橋戸町が入っているのは、幕府の制度上、河原町と橋戸町は掃部宿の「枝郷」だったからです。それでは絵図から読み取れる歴史を見ていきましょう。

■街並みと田畑 中央を南北に走っているのが日光道中（旧日光街道）ですが、右下の写真は中心部の拡大です。

道の上に「掃部宿往還」と記されています。その左右には屋根のみが描かれた家が軒を連ね、「御伝馬屋敷」と記載されています。この「御伝馬屋敷」とは制度上の屋敷名で宿場の「伝馬役」という輸送経費を負担する屋敷のことです。ちなみに家屋の形態や特定の生業を示すものではなく、当時は諸問屋や小売店などが数多く立地していました。

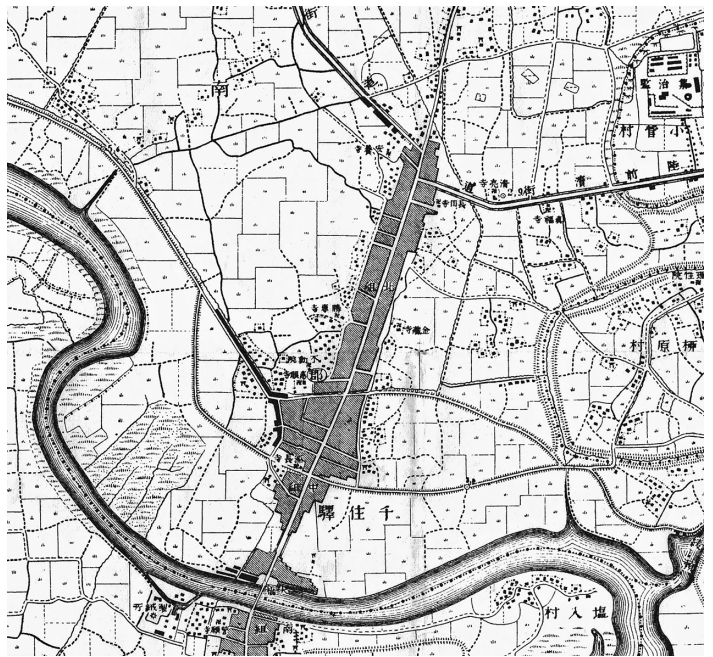
注目されるのは、街並みを境に左



絵図の部分拡大 日光道中を「掃部宿往還」と表記。左上は氷川社（現在の千住仲町の氷川神社、右下は八幡社（現在の千住宮元町の八幡神社）

右に広がった田んぼと畑です。これまで明治時代の地図から、水田が広がっていることを想定していましたが、本図に描かれた掃部宿中心部の東西（左右）には濃い色で塗られたように、畑が広がっていたことがわかります。

次のページに掲げている明治時代の地図は明治十三年（一八八〇）の測図ですが、絵図に描かれた畑はおおむね市街地（斜線で黒く表現されているところ）となっていることが読み取れます。ちなみに「御伝馬屋敷」裏手も、屋敷に付属した畑地として濃い色で塗られています。



二万分之一迅速測図「下谷」 明治13(1880)年測図、明治20(1887)年発行

詳)。村を開いた石出家の伝統を踏まえた命名だったのでしょう。吉長の子は、幕末維新期に千住宿全体の惣代(代表)をつとめた石出雄三郎吉孝でした。

提出先の「中村八太夫様御役所」とある人物の実名(じつみよう)は幕府の代官、中村知剛(ともかた。一七四七〜一八四

三)でその役所を意味します。

江戸近郊の幕領を支配し、馬喰町の代官屋敷に詰めていました。千住宿の間屋場・貫目改所には配下の役人を派遣しており、宿場としても在郷町としても当時の千住宿の担当役人として知られた存在でした。

今回、紹介した「千住掃部宿絵図」は、いちど博物館で展示してありますが印刷物で紹介していないことから本誌でご紹介しました。来年の千住宿開宿400年に向けてこれから新資料をご紹介していきます。

(学芸員 多田文夫)

■石出吉長と代官・中村知剛 この絵図を提出したのは千住掃部宿の名主・庄左衛門、年寄・善兵衛、百姓代・嘉七の三名で、名主の庄左衛門は、掃部宿の前身である掃部新田の開発人石出掃部介吉胤家の十二代目、石出吉長(一七八五〜一八三四)です。宮内村(埼玉県北葛飾郡杉戸町)の名望家の濱田家出身の母「くら」の子で、自身も濱田家出身の「はる」を妻とした人で、濱田家と縁が深い人物です。

吉長は書家の亀田鵬斎とも交流し、鵬斎から扁額「開邑亭」(かいゆうてい)をもらっています(原品は未

新田開発と稲荷

関口 崇史

文政十一年(一八二八)成立の地誌『新編武蔵風土記稿』(以降『風土記』と略記)には江戸時代当時の足立の村々の情勢を知ることができ。本稿では、『風土記』の各村の鎮守に関する記述を手がかりに、その分布の特徴を中心に考察する。なお、千住宿は各丁目、町にそれぞれ鎮守があり、その様相が異なると考えるので今回は取り上げていない。鎮守となった神社の内訳について『風土記』によれば

氷川社	十四カ村
稲荷社	十四カ村
八幡社	二カ村
第六天社	二カ村
神明社	二カ村
諏訪社	一カ村
記載なし	六カ村

となっており、氷川・稲荷両社が圧倒的に多い。さらに両社の分布に注視すると、氷川社は西部に広く分布しているのに対して、稲荷社は東部、とくに綾瀬川以東に広く分布していることが判明する。(三頁図参照)

西部は淵江村・沼田村・伊興村・保木間村といった中世以来の村落があ

る地域である。また、伊興村・保木間村・竹塚村三カ村の鎮守である伊興氷川社、舎人村・入谷村・遊馬村(現、草加市)三カ村の鎮守である舎人氷川社のように複数の村の鎮守を兼ねる神社もあり、これは氷川神社のみの特徴である。一方、東部には普賢寺村・北三谷村といった江戸時代初期に開発された村をはじめとする江戸時代以降に成立した新村が集中する地域であった。つまり、東西を二分するように分布する氷川・稲荷両社は各村の成立時期に起因しているのである。

本稿では新田開発地域に多い稲荷社について『風土記』の記述からさらなる特徴について考えてみたい。

■新田開発と稲荷

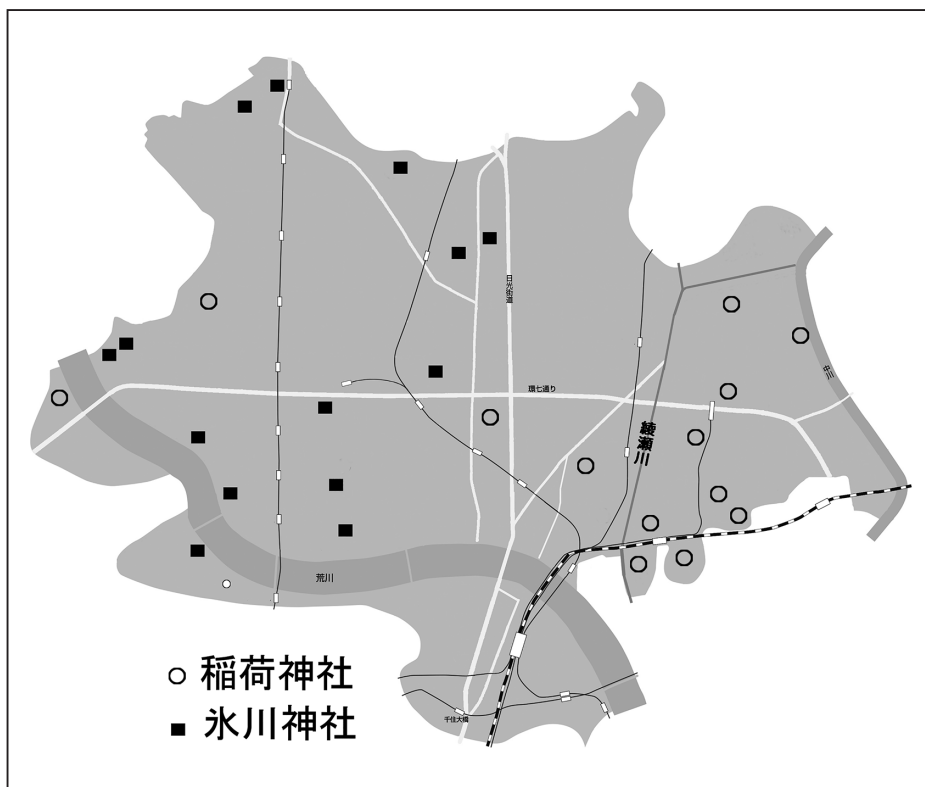
稲荷信仰は、都市部では「流行神的現象で、商売繁盛や病氣治しに霊験あらたかな神」として、農村部では農業神として機能したように、多面的な展開をした信仰である(宮田、一九八四年)。新田開発で成立した村の鎮守稲荷社は豊作を祈る農業神への信仰が中心と考えられるが、小右衛門新田の稲荷社(現小右衛門稲荷神社)のように稲荷神に命を救われた開発者が、後に稲荷社を祀る場合もあったようである(『足立区風土記稿』地区編5)。

■村持の稲荷

鎮守社の管理という視点から、稲

荷社について考えてみたい。鎮守社に限らず江戸時代の神社は村が管理する「村持」と寺が管理する「寺持」があった。明治の神仏分離令以前には、寺持の神社は別当寺と呼ばれる寺院に管理されていた。

足立の鎮守稻荷社の場合、村持は、西部の鹿浜新田（鹿浜村別村）、東部の小右衛門新田・次郎左衛門新田・長左衛門新田・佐野新田・辰沼新田



鎮守を稲荷神社・氷川神社とする村の分布図

『新編武蔵国風土記稿』より作成

* 村鎮守と明記されているものに限る。また、現在の主神、鎮守名と異なるものもある。（千住地域及び柳原は除いた）

の六カ村であった。これらの村は稲荷社以外に寺社がないか、小堂や庵しかない村であった（『風土記』）。村持の鎮守は稲荷社のみの特徴である。

■ 寺持の稲荷

寺持八カ村の別当寺は以下の通りである。

① 加々

領家村（現埼玉県川口市領家）、日蓮宗感応寺

- ② 皿沼
- 鹿浜村、新義真言宗宝蔵寺（豊島郡赤羽村宝幢院末）
- * 加々・皿沼は鹿浜村の別村、ともに鹿浜村の元小名
- ③ 久右衛門新田
- 日蓮宗法立寺（嶋根村国土安穩寺末）
- ④ 北三谷村
- 新義真言宗宝蔵寺
- ⑤ 普賢寺村
- 新義真言宗養福寺
- ⑥ 五兵衛新田
- 新義真言宗観音寺
- ⑦ 蒲原村
- 新義真言宗円性寺
- 以上、葛飾郡青戸村宝持院末
- 寺持は日蓮宗寺院が二カ村、新義真言宗寺院が六カ村である。氷川社他の鎮守の別当寺も新義真言宗が多く、西新井総持寺、本木吉祥院、沼田恵明寺の末寺が勤めている。そして、東部の寺持の稲荷社の別当寺も新義真言宗の宝持院末の寺院であった。
- 青戸宝持院
- 『風土記』によれば、宝持院は隣郡の葛飾郡青戸村（現葛飾区青戸）所在の新義真言宗寺院で、醍醐寺報恩院末であった。天養二年（一一四五）の創建で、開基弁証と伝え、慶安元年（一六四八）に江戸幕府より五石の寺領を賜っている。また、近郷三十カ寺の本寺であった。つまり、足立の新田村には総持寺をはじめとする郡内有力の新義真言宗寺院の勢力とは異なる宝持院の勢力が流入したのである。

江戸時代における足立の鎮守についてその分布状況を中心に考察した。江戸時代以前成立の村では氷川社を、以後成立の村では稲荷社を鎮守とする傾向が顕著であった。また、稲荷社の場合、鎮守の管理は村持・寺持があり、村持は稲荷社のみの特徴であった。さらに、稲荷の別当寺の多くが青戸村宝持院の末寺であったことも明らかであり、同地域における新義真言宗の分布としても興味深いものであった。

【参考文献】宮田登「稲荷信仰の浸透と民衆」（直江廣治編『稲荷信仰』雄山閣出版、一九八四年、初出は一九七六年）

（足立区文化財調査員）

見学できます

足立区登録無形民俗文化財

押部阿弥陀院 百万遍

大数珠をみんなで回しながら念仏を唱え、集落の無病息災を祈る行事です。

日にち 令和6年5月26日(日曜日)

時間 午後3時から

場所 阿弥陀院 鹿浜7-19-7

お化け煙突60年 ⑬

燃料②
格和宏典

■リヤカー送炭 第1貯炭場は、貯

炭量5000t、送炭方法は自然落下式送炭設備で、貯炭場の中央にある送炭ホッパーに石炭を落とし込みました。5000tのうち自然落下での送炭は1100t。残り3900tは機械力の導入までは人力による送炭を行いました。人力送炭は、水力の予備火力で発電も時たまという時代、余裕をもって送炭が行えるという想定のものであったと思われます。

しかし、常時発電になると請負作業員が2人一組となり、リヤカーに満載した石炭を中央にあるホッパーまで運び、次々に落とし込んだとい

います。服装はサルマタひとつに地下足袋、頭にハチマキといういでたちで、ハダカになって脂汗と石炭ほこりで真っ黒になり、全身から滝のように流れる汗にまみれて調子を取りながら立ち廻り、一升飯を食べながら送炭したということです。

リヤカー送炭が間に合わなくなる

と発電所の社員も駆り出されたよう

よる送炭が不十分だったため、肩荷役(かたにえき)、通称軽子(かるこ)と呼ばれる作業員が台秤(だいばかり)でパイスケ(註)ひと籠ずつ計量し、排水口あたりまで運んだといひます。排水口にあいび板と呼んだらしい板を渡し、石炭をかついだ軽子がその上でふらつき水路に落ち込むこともあったといひます。

そこで、リグレミングクレーンやポータブルベルトコンベアー、ストッキングコンベアーなどを設置し機械力の充実を図り、重作業の解消、労働環境の大幅な改善がはかられたということです。

機械力の無い時代、送炭作業は人手に頼るしかなく、なみなみならぬ苦労があったようです。

発電所廃止後、本館と貯炭場跡地は、東電の関連企業、東電物流株式会社東京事業所が配電用資材の保管・管理・運営に使用しています。

構内には、煙突位置を示すマージングがありました。筆者は平成二八年に、当時、千住資材センターだった現地で確認しました(詳しくは『お化け煙突の世界 思い出すままに』に記述)。今回、この場所を管轄している東京電力/野支店に確認

しましたところ、現在、このマージングは不明であるということでした。

■石炭計量機 メリ

ツク式S型と言ひ2台設置されていました。石炭を扱う作業員詰め所に遠隔表示装置および印字装置が設置してあり、ここで揚炭数量を把握し、石炭受け渡し数量の証明を行いました。

毎年1回、東京計量器検定所の部品および性能の検査を受け、合格後初めて使用するという厳正対処で、使用中に疑義が生じた場合は、すみやかに石炭の重量テストなどが実施されていました。

■重油 隅田川上流側取水口の脇に

530t、下流側、灰処理場と社宅の境界あたりに2000tのストレージ(貯蔵)タンクがあり、汽缶室A室、隅田川寄りの4号缶隣接屋外に設置してある60tのサービスタ

送炭風景

バンカーエレベーター

石炭

リヤカーからホッパーに
石炭を落とし込んでいる

ホッパー

送炭風景のイメージ図(格和氏画)

の重油専燃缶と他の11缶の助燃装置へ送油する間にオイルヒーターで90〜95℃程度に温め、バーナーで噴霧し燃焼させました。重油の油質や成分などは資料が無く不明です。資料が見つかればラッキーです。

(元千住火力発電所所員)

(註) パイスケ：篠竹などで編んだ円形の浅い籠のこと。